

北のみち普請 / 来し方と行く来

— 共生(ともいき) 社会の構築 —



北のみち普請を育てる会 会長
北海道大学 名誉教授

小林 英嗣

1. はじめに

道や街道は古来より、人々や物資の往来そして生活と生業を支え、また地域社会の出会いの場であり、文化の伝播や地域産業を支える重要な役割を担ってきました。中世・近世から戦後まで日本人はこのような自分たちの道・街道を地域の共同体の力でつくり、安全・快適にそして美しく守り・維持し、津々浦々の経済発展と交流を支えてきました。特に江戸末期から明治初期に来日した多くの外国人からは驚嘆とともに世界にも希な国家・国土と地域社会を維持する共助の文化として高く評価されました。普請という「地域共助の力」が地域の発展と共同社会の安全と安心の生活を支えるという日本独自の生活・社会文化が評価されたのです。

江戸時代や明治期にわが国を訪れた外国人は、日本を美しい国と賞賛し、それを支える地域共同体の役割とその力を高く評価していました。自然風景ばかりでなく街や村、そして里地・里山も美しく、地域にはそれらをマネジメントする地域共同体の大きな力と官(藩)との協同的連携がありました。現在でも地域共同体の力は、歴史的な市街地の一部や農村・漁村そして中山間村には着実に残っています。しかし第2次世

界大戦以降、特に都市を中心に街が醜くなり、それと同時に農村・田園が崩壊し、地域共同体も喪失し、荒んだ国家・日本となってしまいました。

また戦後の急速な近代化を支える都市化に伴う都市基盤の整備、そしてモータリゼーションの急速な普及の過程で、いつしか道や道路では車が主人公となり、道普請は道路維持という言葉に置き換わり、地域「共助」による普請意識は薄れ、いつの間にか公共事業(=「公助」)となり、同時に地域の文化や地域コミュニティなど、地域力を支える多くのものも失ってしまいました。

また、生産性が上がりすぎ、行き過ぎた資本主義社会が地域や家族の解体・崩壊という先進国家とは言えない社会現象を引き起こし、個人的モラルの崩壊から始まり近隣意識の喪失、そして近年の失踪超高齢者の出現などをはじめとする異常な先進国日本の社会の姿を露呈し始めてきています。

2. 北のみち普請のスタート

このような社会の変容と地域力の衰退に直面し、北海道の各地域では住民や企業が率先して身の回りの公共空間、特に道路などでのごみ清掃や沿道の花植えな

を進める小さな運動が芽生え始めていました。そこで、このような地域の動きをさらに支援し、全道の運動へと展開・普及することを目的として、平成13年度に「北のみち普請を育てる会」を発足させ、全道各地域、また全国各地の運動とも連携してゆくことを始めました。以来、道内各地において道普請活動を支援し広げるため「地域コミュニティと道路空間」のテーマのもとに寄合(フォーラム)や協働作業(ワークショップ)を開催してきました。

その頃を振り返ってみるならば、「北のみち普請を育てる会」は地域共有の場である道路を舞台としながら、北海道の各地域で、道路のみならず地域の公共空間、共有空間をみんなで守り、維持し、生活に活用しながら、地域の力、特に地域共同体(コミュニティ)の力を再生しようとする理念がその背景にありました。その後10年間の活動を通じ、北海道各地で独自の道普請活動の芽が生まれ、また多くの成果(と同時に今後の課題)も見えてきています。このような活動の力を運動し、協働・協創の輪をひろげながら、世代を超えた地域住民と行政のパートナーシップによる地域再生もこの会の目標です。

3. 世界に学ぶ

近年ガーデニングを学ぶためにイギリスの都市郊外や農村地帯を訪れた日本人は、美しい風景に心を奪われ、賞賛します。豊かで安定した農業の姿を実感し、建物は長い間その地の風土になじんだものがほとんどで、スローではあるが着実で安定した時の流れを実感します。イギリスの風景が美しいのは、つくり、守ろうとする人々の強い意思に支えられているからです。しかしこのイギリスの風景の美しさは日本から学んでいった成果なのです。

100年以上前、日本の美しさ、そして豊かな文化と風土に驚いた西欧人はこぞって自国で警鐘を鳴らし新しい国づくりへと結実させたのです。近代化や経済性を理由に、開発や自然破壊はやむを得ないという論理は的外れているといわざるを得ません。特に産業革命をおこし、世界に先駆けて都市開発や環境破壊の洗礼を受けたイギリスは、強い自覚のもとで開発や破壊行為を国民自らの手で律し、次世代に美しい国を残す動きを始め、現在のような美しいイギリスを再生させたのです。

戦前まで、私たち日本人は土地を大切に、樹木や作物を丁寧に育て協働で管理し、第二の自然を見事につくり上げました。幕末の開港時にケンペルを始めとした多くの欧米の有識者は、日本の農村を見て感動しています。ものの見事に人間の手が入った精巧な里山や田畑を見て、農業とは見なすことができずに「horticultures(園芸)」と表現しました。また、当時のガーデンシティ都市の環境が悪化しつつあったイギリスからの使節団は、全国の城下町にも感嘆した報告を行い、江戸時代に日本人がつくり上げた国土の豊かさと環境を範とした「ガーデンシティ(庭園都市)」という近代都市計画の理念がイギリスにおいて生み出されたのです。

江戸時代は、独特の産業、経済の発展があり、欧米とは異なる独自で高度な文明をもたらした変革が物静かに進行し、その成果は着実に地域社会に蓄積されていたのです。限られた資源を自然に配慮しながら有効に活用し、進んだリサイクルの体系があり、同時代の西欧社会より進んだシステムが構築されて、江戸、大阪は当時のロンドン、パリと比べてはるかに清潔で環境に配慮された循環都市でした。江戸開府から400余年経ちました。人口増加と資源の浪費にブレーキをかけ、環境と調和した成熟した生活が営まれていた江戸中後期の日本独自の国土や地域を自主的に管理するシステムは意味深いものです。

4. アイルランドのタイディタウン運動

北海道と規模や人口が似ているアイルランド(イギリス領北アイルランドではなく)で、1958年より50年以上続いているタイディタウン運動(タイディは、「こざっぱりとした、きちんとした」という意味)は、国土の風景やまちの美しさを地域コミュニティが企画運営する運動で、誇りを持った意識の醸成と環境・景観の再生を目的にし、全土で展開されてきました。当初は妖精探しの観光客を少しでも多く誘致することを目的とした「ごみの片付け活動」でしたが、1980年代半ばから、①風景・景観、②地域の精神と文化、③環境循環、④生活質の固有性、を産業政策とツーリズムの資源にする枠組みに発展し、EUの農村振興政策などと相補して展開されています。暖流で冬枯れしない緑の大地は、春には黄色のゴース、夏には真紅フューシャ、秋には紫やブルーのヒースで色づき、コンパクト

トな石積み集落での生活景はまるで挿絵で見る情景です。タイディタウン運動は「子ども達が安全に暮らし、美しい国土と自分の隣人や地域社会にプライドを持てるようにする」ことも趣旨に加えています。2001年に行われた調査では全ての地域での人口が増勢に転じ、「観光収入は10年間で3倍、国民の12人に1人がツーリズムに携わる」という成果も生み出しました。

私が政府担当局と地域の活動団体に行ったヒアリングから、地域をマネジメントする戦略を実感することが出来ました。

その第一が、地域政策の変化です。神話性のあるケルト文化や遺跡などの観光資源に依存する受動的な政策から脱皮し、地域の方で再生した街や村のこざっぱりとした美しさと安全、地域固有の生活の質、農村の多面性や新産業などの地域資源を活用した創発的政策への転換です。

第二は、地域再生政策が地域社会の価値を高める包括的なエリアマネジメントとして認識されており、都市地域計画と都市社会計画との重層化と、その担い手、主体の変化です。人口400万人のアイランドにおける、田園・農村域でのタイディタウン運動と都市域でのCity Neighborhood運動を連動させ、明確なローカルアジェンダのもとで都市・地域を再創出するコミュニティ、企業、専門家集団の協働システムの重要性を再確認することができました。また同時に、20世紀を支えた都市社会基盤と21世紀の持続的かつ環境共生を主題とする都市環境を支える社会基盤の内容と目標は大きく異なって捉えており、人間の本質的な生存と生命、そして高質なQOL（クオリティ・オブ・ライフ）や感動や地域とともに生きる喜びの体感と生活環境を支える生命基盤としての社会基盤資本（都市・街路・公園・河川など）と地域共同体によるコミュニティ資本（生垣や家並み、農地など）の利活用の可能性を模索していると理解することも出来ました。

5. タイディタウン運動から学ぶ ‘三つの共生(ともいき)’

その後何度かアイランドを訪ね、タイディタウン運動の歴史と展開、内容と目標、成長と成果などについて政府、自治体、地域の活動家、企業などへのヒアリングを重ねてきました。するとタイディタウン運動の原点、より正確に言うならば哲学・理念・目標に類

するものがこの運動の底流に存在していることに気がつきました。それは、21世紀、成熟社会を迎えつつあるわが国の地域社会の持続的発展や地域共同体の再生、そして地域マネジメントにとって極めて重要な‘三つの共生(ともいき)’です。

最初の共生は‘自然共生’です。地球環境やエコシステムから説くまでもなく人間存在の持続可能性の基本は—生命・生物的自然との共生—にあることは自明です。都市や田園そして農村に緑や生垣、そして花などを増やすことから始まり、無機的な人工環境都市に生物的自然の豊かさを取り戻し、生物の多様性を再生すること、河川沿いにはビオトープネットワークを創り、緑の回廊を都市内外の地域にめぐらして生物的自然と人間社会の共生を図ることで、アイランド人は‘妖精の通り道’とも言っています。

次いで‘環境共生’があります。環境循環型社会や低炭素型地域社会を目指し、生物的自然以外の循環環境や省エネルギー、食物の地産地消に配慮したスローライフを基本とした都市・地域そして農村の再生などの物質的自然との共生です。低炭素型社会のライフスタイルやワークスタイルの共有化した街や地域経済の再生でもあります。

最後が‘地域共生’です。21世紀、特に地方中小都市では‘自然共生’‘環境共生’だけでは不十分であることが、食料等を含む地球環境の世界的な混乱から分かっています。グローバルには発展途上国と先進国、日本国内では大都市圏と地方圏、都市と農山村、都心と郊外などの衝突が続いています。本来的に潜在するそれらの個性や特徴をお互いに出し合って、ダイナミックな交流（物流・人流）・連携・共生し、失われた地域力を支える地域共同体の再生・再創を目標にして、持続可能な地域マネジメントを目指すことが‘地域共生’です。

人口400万人のアイランドで約50年間じっくりと継続してきたタイディタウン運動は、‘モータリゼーションの発達に依存した膨張型都市づくりが都市の持続可能性（サステナビリティ）や地域共同体の崩壊を引き起こしている現状を脱出し、持続可能な都市への再編と再生’を目標として、新たな共生（ともいき）社会を創出にチャレンジしてきたのです。家の回りから地区・都市、地域全体まで市民、NPO、行政そして企業などの共同によって、持続的な美しいアイランドの再生に成功したのです。

6. ‘任せる地域づくり’ から ‘引き受ける地域づくり’ へ

10年間、多くの地域を訪れ、道普請活動を展開されている方たちとの交流を通じて北海道そして全国各地で独自の道普請活動の芽が確実に生まれてきていることを実感します。このような活動の力を連動し、協働・協創の輪をひろげながら、世代を超えた地域住民と行政のパートナーシップによって小さく地味けれども、キラリと光って長続きしているたくさんの地域活動の交流と支援がつづき、地域活動の成果を持ち寄り、全道・全国へ発信してきました。

新たな政権になってから特に実感することは、地方分権そして地域主権の大きなうねりの中で、地域力、とりわけ市民・NPO・企業などによる都市づくり・まちづくりの力量が問われるようになってきていることです。国（＝中央）の価値観と統一的な目標に従って各種の政策と計画・事業を遂行していればよいという時代は終わりました。また地域基盤の整備や維持管理に対してはこれまでのような順風ではない逆風も吹いており、身近な道路や公園などの管理水準や管理内容の低下を目にすることが多くなりました。このような社会状況の中、自分たちの地域を成熟した安心・安全の社会へと移行させるためには、各自治体と住民、NPO、企業が相応の覚悟で実効性のあるシステムを地域につくりあげることに邁進することがますます重要になっています。これが私の考える‘任せる地域づくりから引き受ける地域づくり’、‘裾野の広い地域社会システム’の根幹です。

今年度の「北のみち普請を育てる会」総会で、「これからの北のみち普請のあり方を議論してきた過程で『公助にたよる地域づくり』から『自助・共助による地域再生』という理念で今後の活動内容や方向性を確認しました。その折、道普請活動に参加されているメンバー相互の共益的活動を基盤としつつ、広い広がりを持ったまちづくり人や都市地域づくりの支援や実行で奔走されている団体や自治体まちづくり家と広く連携をとり、公益的な道普請活動を拡充・多様化することを目指して活動を継続しましょう」とご挨拶を申し上げました。

加えて、10年間、多くの地域を訪れ、道普請活動を展開されている方たちとの交流を通じて北海道各地で独自の道普請活動の芽が確実に生まれてきていること

を実感してきました。このような活動の力を連動し、協働・協創の輪をひろげながら、世代を超えた地域住民と行政のパートナーシップによって小さく地味けれども、キラリと光って長続きしているたくさんの地域活動の交流と支援を継続することが大切です。「頑張らないけど諦めない」ことが大切です。アイルランドのタイディタウン運動は50年継続することによって、地域共同体の再生、地域空間の再生、そして地域経済の再生も成し遂げました。北のみち普請の活動も遠い未来の北海道ヴィジョンを思い描きながら、その活動の「輪」「和」「環」を広げ続けてゆくことにしたいと考えます。従来の寄合活動に加え、団体等が一堂に会してお互いの活動を知り、そして啓発し合う交流等の場を設けることも重要です。交流等の場としては、団体等が活動の発表や「道普請」の普及啓発に向けた協働作業を行うことが考えられます。「官民協働部門」「コミュニティ形成部門」「景観創出（保全）部門」「産業創造部門」「観光連携部門」等の具体的なテーマの設定も有効でしょう。地域選出の審査委員と全国からの専門的審査委員の合同により優れた活動を表彰することで地域意識の高揚も期待できます。

「北のみち普請を育てる会」の活動においては、お互いに活動を支えあう人の和（わ）こそが本質であることに皆さん気がつき始めています。「北のみち普請を育てる会」が団体等を具体的に支援、または団体相互が支援（応援）のための仕組み等を研究する段階に来ているとも言えます。例えば、活動の掘り起こしや仕掛け、活性化等をアドバイスできる人材の発掘と登録、そして団体等から応援要請があった場合、それを斡旋する等、アドバイザー制度の創出などもあります。また、活動資金（助成金等）の情報等を提供することも重要です。このような視点から「北のみち普請を育てる会」の法人化（NPOなど）も視野に入れながら今後の活動を確実なものにしてゆく必要があります。

私たち‘北のみち普請人’は共生（ともいき）社会＝‘引き受ける地域づくり’を目指して、まだ長い旅を続けていきましょう。